

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～ポーランドと日本の「絆」①生きる勇気をもらったキス～

ポーランドの場所って知ってますか？……

今回は日本とポーランドの実は深い関係です。

1918年、ポーランドはロシアからの念願の独立を果たします。それまで50年以上にわたって、独立を求めて武装蜂起しては、そのたびに失敗。多くの兵士が囚われの身となってシベリアで強制労働をさせられていました。そんな男たちを追って、恋人や家族もシベリアに行く決意をします。そのため当時のシベリアには十数万人ものポーランド人がいました。しかし、シベリアでの生活は、常に飢餓と疫病の脅威にさらされています。親を失って孤児となった子どもたちは、悲惨な状態に置かれていました。



「この子どもたちを故国ポーランドへ送り届けたい！」命の危険にさらされる孤児だけでも救い出そうと、1919年ウラジオストク在住のポーランド人が「ポーランド孤児救済委員会」を設立。しかし、ポーランドとロシアとの戦争が始まり、シベリア鉄道で送り返すことはできなくなってしまいました。そこで、世界各国に救助を要請、その中で最も熱心に救済に尽力したのが日本だったのです。

日本赤十字社は、孤児たちの救済を即決します。そして765人の子どもたちが日本にやってきます。

日本までの長旅の間、不安な気持ちで過ごしたであろう孤児たち。日本に到着すると…待っていたのは…

歯科治療や散髪のボランティアを申し出る人たち。衣類やお菓子・おもちゃや人形などを持ち寄る人々。寄付金を申し出る人も後を絶ちませんでした。そして、お見舞いに訪れた日本の子どもたちは、自分が来ている洋服や身に付けていた髪飾りを迷わずポーランドの子どもたちに差し出したのです。

23歳の看護師、松澤フミさんは、腸チフスにかかった子どもに対して…

「せめて私の胸の中で死なせてあげたい。」

と、その場を離れませんでした。彼女の献身的な看護を受け、その子は奇跡的に回復します。しかし松澤さんは、腸チフスに感染し、殉職しました。……また、こんなポーランドの女の子の回想もあります。

「ひどい皮膚病にかかっていた私は、全身に薬を塗られ、ミイラのように白い布に包まれていて、看護師さんにベッドに運ばれました。

その看護師さんは、私をベッドに寝かせると、布から顔だけ出している私の鼻にキスをして微笑んでくれました。

私はこのキスで「生きる勇気」をもらい、知らず知らずのうちに泣き出していました。」

こうして、来日当初は青く痩せこけていた子どもたちは元気になっていきました。

そして、お別れの日。送られるポーランドの子どもたち、見送る日本人も涙・涙・涙…765名のポーランドの子どもたちは旅立っていきました。

子どもたちを送り届けた日本船の船長は、毎晩、ベッドを見て回り、一人一人毛布を首までかけては、子どもたちの頭をなで、熱が出ていないかどうかを確かめたといいます。

「お父さんの手は、きっとこんなに大きくて温かいんだろうなあ」

と、薄目を開けて、船長の巡回を心待ちにしていた子どももいたそうです。

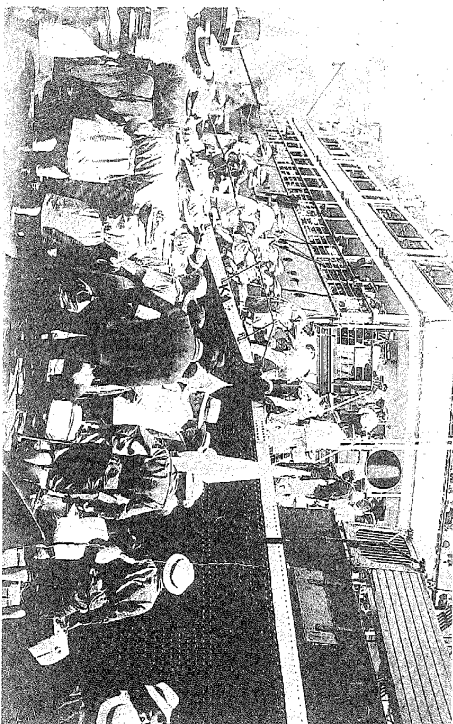
この子どもたちは、帰国後、孤児院に収容され、それぞれの人生を歩いていくことになりました。

大正末期、日本がまだ貧しかった頃のお話です。

『人生に悩んだら『日本史』に聞こう』白駒 妃登美&ひすい ことろう（祥伝社）



神戸港からポーランドに帰国するため乗船する孤児ら(日赤大阪府支部提供)



ポーランドと絆 神戸港紡ぐ

シベリアから救出の孤児ら1世紀前、祖国へ

100年前の1922年、日本によって暗襲のシベリアから助け出されたポーランド人の孤児300人が、祖国を目指して神戸港を出港した。節目期に国境を超えた交流や人連繋の大切さを伝えるため、歴史を振り返る展覧「シベリアのポーランド孤児救済」が14日、神戸市中央区勝海浜海岸1、国際健康開発センターのホールひびきで開クマ交流展「ポーランド経済史を専門とする関西学院大名誉教授で、展示を企画した日本ポーランド協会副会長としての代表藤井和夫さん(72)は「孤児救済は、今日に至る暫く歴史の礎にたったと分析。西普の縁は、阪神・淡路大震災の被災児をポーランドに招くという交流にもつながった。

そもそも、なぞ多くのポーランド人が暗襲のシベリアで助けを待たなければならなかったのか。話は15万、20万人がシベリアで暮らしていた1920年ごろにさかのぼる。ポーランドは1915年から1918年間、欧州列強に分割され、独立を目指して反乱を起した人らがシベリアに送られていた

「六甲山や街並み、目に焼き付けたはず」

今回の展示では安美に加え、子どもの救出活動が計画された。1回は東京に受け入れる計画で、2021年に375人を助け出して紹介。西国の国交樹立の10年に合わせてラウサーが募集された。神戸市の数回に上陸した子どもたちは列車で東京に移り、父教の「福田会館」で伸びの「家」の約20枚や、現代のポーランドの若手作家が「メジ」に描き伸びと通じた後、横濱港から租界に戻った。22年8月には、新たに30人が大阪市にやってきた。同市入場無料。28日まで。午前10時から立派の夕食を無償提供。泊半午後3時。土曜日休み。17日展覧会もある。神戸市から藤井さんによる展覧会も、参加は問い合わせてください。神戸市港務が必要。兵庫国際交流協会から租界へ。藤井さんは「神戸港078・230・3267

子どもたちだけでなく、助けてもらえなかつた。当時の日本政府は赤十字に救済事業を依頼し、2回の救出活動が計画された。今回の展示では安美に加え、子どもの救出活動が計画された。1回は東京に受け入れる計画で、2021年に375人を助け出して紹介。西国の国交樹立の10年に合わせてラウサーが募集された。神戸市の数回に上陸した子どもたちは列車で東京に移り、父教の「福田会館」で伸びの「家」の約20枚や、現代のポーランドの若手作家が「メジ」に描き伸びと通じた後、横濱港から租界に戻った。22年8月には、新たに30人が大阪市にやってきた。同市入場無料。28日まで。午前10時から立派の夕食を無償提供。泊半午後3時。土曜日休み。17日展覧会もある。神戸市から藤井さんによる展覧会も、参加は問い合わせてください。神戸市港務が必要。兵庫国際交流協会から租界へ。藤井さんは「神戸港078・230・3267

100年前の1922年、日本によって暗襲のシベリアから助け出されたポーランド人の孤児300人が、祖国を目指して神戸港を出港した。節目期に国境を超えた交流や人連繋の大切さを伝えるため、歴史を振り返る展覧「シベリアのポーランド孤児救済」が14日、神戸市中央区勝海浜海岸1、国際健康開発センターのホールひびきで開クマ交流展「ポーランド経済史を専門とする関西学院大名誉教授で、展示を企画した日本ポーランド協会副会長としての代表藤井和夫さん(72)は「孤児救済は、今日に至る暫く歴史の礎にたったと分析。西普の縁は、阪神・淡路大震災の被災児をポーランドに招くという交流にもつながった。

そもそも、なぞ多くのポーランド人が暗襲のシベリアで助けを待たなければならなかったのか。話は15万、20万人がシベリアで暮らしていた1920年ごろにさかのぼる。ポーランドは1915年から1918年間、欧州列強に分割され、独立を目指して反乱を起した人らがシベリアに送られていた

交流の歴史や手記紹介、28日まで

（安藤真子）

で始まった。

「ポーランドは1918年

が当時の神戸商工会議所で休憩し

たこの記録も残っているという。

17年のロシア革命から続く内戦状

態にあった。人々は混乱の中で家

を失い、凍土に倒れ、大勢が命を

落した。悲惨な状況を知り、当時の様

子と記録する数少ない資料の一つ

として、日本を去る際、子どもたち

が自ら焼き付けた最後の景色は

救済委員会を設立。シベリアに

出兵して、各国に救済を依頼

し、手を挙げたのが日本だった。

子どもたちだけでなく、助けて

もらえなかつた。当時の日本政府

は赤十字に救済事業を依頼し、2回

の救出活動が計画された。

今回の展示では安美に加え、

子どもの救出活動が計画された。

1回は東京に受け入れる計画

で、2021年に375人を助け出して

紹介。西国の国交樹立の10年に

合わせてラウサーが募集された。

神戸市の数回に上陸した子ども

たちは列車で東京に移り、父教

の「福田会館」で伸びの「家」の

約20枚や、現代のポーランド

の若手作家が「メジ」に描き伸

びと通じた後、横濱港から租界

に戻った。22年8月には、新た

に30人が大阪市にやってきた。

同市入場無料。28日まで。午前

10時から立派の夕食を無償提供

。泊半午後3時。土曜日休み。1

7日展覧会もある。神戸市から

藤井さんによる展覧会も、参加

は問い合わせてください。神戸

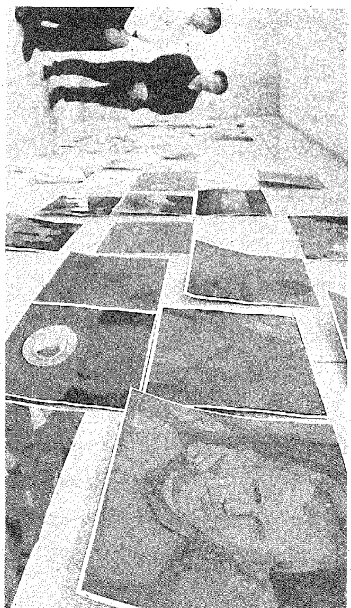
市港務が必要。兵庫国際交流協

会から租界へ。藤井さんは「神

戸港078・230・3267



藤井和夫さん



助け出された孤児らの経験を「メジ」にしてポーランドの若手作家が描いた絵＝神戸市中央区勝海浜海岸1